

社会における自己のあり方を追究する公民学習の工夫

— 単元「高齢化社会と社会保障」の実践を通して —

岩 田 靖

1. はじめに

公民的分野の学習は、現実の社会のしくみやあり方を考える学習であり、それをもとに、その社会の一員として自らが社会とどのように関わりながら生きていくかを考える学習である。しかしながら、授業の現状は、教科書の内容を消化することが第一となり、知識の詰め込み型授業となりがちなのである。そして、学習している内容は自分たちが今現在、生きている社会であるにもかかわらず、その中に生きる人々の姿が見えてこないものになってしまっているのである。

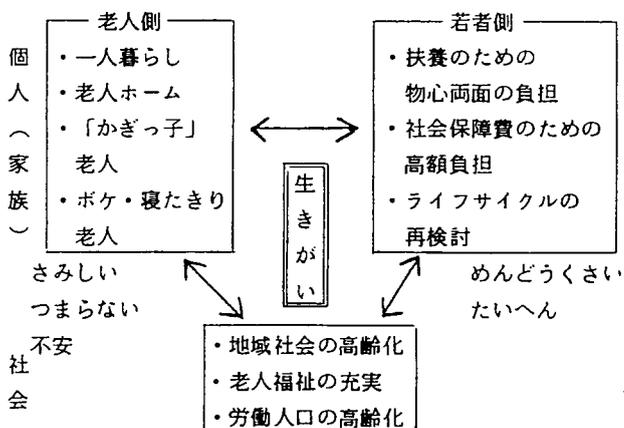
そこで、自分が社会の一員であることを自覚し、家庭・地域・国家・国際社会といった自分を取り巻く社会にどのように関わっていくか、社会の中で自己がどうあるべきかを追究していく学習を進めていくことが必要になってくるように考える。また、第15期中教審の1次答申では、「変化に対応する能力の育成」の重要性を述べ、それに対して、「問題を解決する資質や能力」と「豊かな人間性」の2つを「生きる力」と称しているのである。

こうした点を踏まえて、公民学習の新たな方向をめざして、本県においても大きな課題となっている高齢化社会の問題の実践化に努めることにしたのである。

2. 「高齢化社会」の指導の工夫

(1) 高齢化社会と公民学習

図1 高齢化社会の問題



現在わが国では、高齢化現象が加速度的に進んでおり、それにともなって、図1に示すような様々な問題が引き起こってきている。こうした問題が、これからさらに深刻化してくることは言うまでもないことである。

それでは、指導書には、この高齢化社会の問題がどのように示されているのだろうか。内容の取扱いに次のような視点が示してある。

(1)ーア. (個人と社会) 「…我が国における高齢化の進展とのかかわりで自己の生涯を通した生き方について考えさせるよう留意すること。」

(2)ーイ. (国民生活と福祉) 「…我が国における高齢化や都市化、産業構造の変化などの社会の変化と関連させて指導するように留意すること。」

さらに、(2)ーイ. (国民生活と福祉)のところには、次の2つのことが述べられている。

・「雇用と労働条件の改善」については、「…高齢化の進展や国際化の進展への対応など社会の変化に伴う諸問題を取り上げるとともに…」

・「社会保障の充実」については、「…財政収支の学習や高齢化社会の進展に伴う諸問題との関連に留意しつつ、これからの福祉社会の目指すべき方向について考えさせる。」

一方、生徒は21世紀の超高齢化社会の到来に対して、言葉は知っているものの、高齢化先進県に暮らしているといった実感はほとんど持っていないというのが、現実である。というのも、ほとんどの生徒が祖父母とは暮らさず、遠くからお年寄りを眺めているからではなかろうか。また、大きく変化する社会の中で、生徒自身が自分の将来について見通すことができずに、ライフサイクルというものが持たなくなっているということもその原因の1つにあげることができるのではなかろうか。こうして、生徒にとって高齢化社会というものが、何やらお題目にすぎず、自分のこととしてとらえることのできないものになっているようである。

さらに、生徒たちは、わが国の財政事情も社会保障の今後についても知らず、ただ、去年の消費税アップだけが自分にとっての問題・怒りとなっているのである。

(2) 高齢化社会を扱う視点

それでは、実際に高齢化社会を取り扱う上で、どうい
う点に視点をあてていったらよいのか、高齢化社会の問題
が引き起こってきた背景を検討してみることにする。

図2 高齢化社会の問題が起こってきた背景

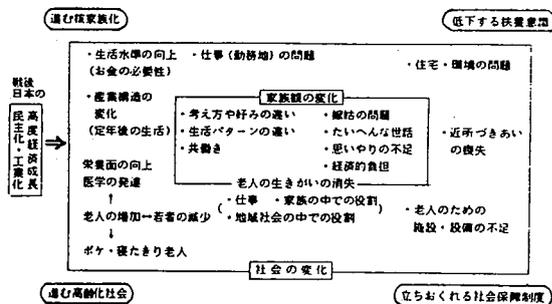


図2にあげたように、戦後日本の民主化・工業化、そして高度経済成長によって、社会のしくみが大きく変化するとともに、個人の考え方や古くからの家族観も大きく変化してきているのである。この「社会の変化」と「個人(家族)の変化」とが、複雑に絡み合い、強め合いながらこの問題を大きな「社会問題」として発展させ、深刻化させていると言えるのではなからうか。さらに、バブル経済の崩壊以後の日本経済の悪化がこの問題に、拍車をかけているのである。そして、こうした問題の中で問われているのが、「生きがい」など、人としての「生き方」の問題なのである。

このような高齢化が、急速に進展する社会の中を生き抜いていく生徒たちにこの問題を扱う上で、次の5点に視点をあてていきたいと考える。

- ① 多角的な視点から高齢化をとらえさせる。
 - ・高齢化社会の現状や将来への展望を明らかにさせる。
 - ・高齢化社会のかかえる問題やその背景を明らかにさせる。
 - ・高齢化社会に対する様々な取り組みと考え方(諸外国も含めて)を紹介する。
- ② 自分自身の問題として高齢化社会をとらえさせる。
 - ・身近で具体的なことからこの問題を考えさせる。
 - ・多様な生き方・考え方や社会のしくみに触れさせる。
 - ・自分自身のライフサイクルや社会のあるべき姿を模索させる。
- ③ 「個人(家族)の問題」と「社会の問題」のどちらかに重点を置くかを明らかにさせる。
 - ・単元「個人と社会」で取り扱う場合には、「個人(家族)の問題」に重点を置く。
 - ・単元「国民生活と福祉」で取り扱う場合には、「社会の問題」に重点を置く。

- ・社会と個人(家族)とのかかわりを考えさせる。
- ④ 老人をはじめとして、社会的に弱い立場にある人を大切にしようとする心を育てる。
 - ・家族としての各々の役割や義務を意識させる。
 - ・社会としての責任に目を向けさせると同時に社会の一員としての自覚を持たせる。
 - ・一人ひとりの持つ「人権」と「生きがい」を大切にさせる。
- ⑤ 多様な体験や表現活動の場を提供し、社会や他人との関わりを深めさせる。
 - ・様々な立場の人や福祉の充実のために活動している人々に出会わせる。
 - ・調査・発表活動が協力して行えるように、役割を明らかにさせる。また、単なる自己主張に終わらないように、相手の意見のよい点を尊重させる。

(3) 公民的分野の学習全体での位置づけ

高齢化社会の学習は、中項目として設けられているわけではなく、どのように学習を組み込んでいくかが課題である。特設単元を設けて集中的に学習していく方法も考えられるが、この問題は、個人の考え方の変化、社会の変化、そして、一人ひとりの生き方・考え方や社会のあり方にかかわっており、それはまさに、公民的分野の学習全体にかかわっているということができるとはなからうか。したがって、前項であげた5つの視点を踏まえながら、学習を積み重ねていくことが大切だと考える。その中で、高齢化社会に視点を置く中核単元を設け、視点を変えながら、繰り返し学習を深めていくことが必要ではなからうか。

高齢化社会に視点を置く重点単元として、次の3つの単元を考えた。そして、それぞれ違った視点を持ちながら学習を深めていくよう構想した。(1)ーア。「個人と社会」においては、「個人(家族)の問題」を、(2)ーイ。「国民生活と福祉」においては、「社会の問題」を、そして、(3)ーア。「人間尊重と日本国憲法」では、全体を総括し、「人間尊重の精神」を視点に高齢化社会をとらえようと考えた。

そして、今回の実践は、(2)ーイ。「国民生活と福祉」の中に位置づけ、「社会の問題」に重点を置いて学習を展開していくものとする。それはまた、今後の租税や社会保障のあり方、シルバー産業など経済的・政治的な課題であり、高齢者など社会的に弱い立場に立たされている人々の人権の問題でもあると考える。こうした人々の立場に立って、考え、共に生きようとする姿勢は、これからの社会を築いていく上で大切な考え方になると確信している。

さらに、この学習は、多角的な追究を可能にすると

ともに、様々な体験・表現の場を提供してくれる。また、将来のわが国のあり方や自分自身のあり方を問いかけるものであり、社会や他人との関わりまで見つめ直させるのである。

本単元「高齢化社会と社会保障」の実践は、平成9年6月～10月、3年生4クラスで行ったものであり、次のような指導の工夫を考えた。

＜授業の視点と指導の工夫＞

○内容（題材）的な視点

- a. 急激な高齢化社会の到来と社会保障の現実とそのあり方について（政治的な視点から）
- b. 官と民との高齢化に対する対応と協力（経済的視点から）
- c. 高齢化に対する町づくり、人づくり（さまざまな隙間をうめるものとして）

○方法面からのアプローチ

- ア. 主体的な追究を大切にする
 - ・「大きな国家」か「小さな国家」か
 - ・自己目標の設定と自己評価の実施
- イ. 多方面からの情報収集とメカニズムの解明
 - ・夏休みの調査学習、発表会
- ウ. 意志決定の場の設定
 - ・他国や他市町村の取り組みと町づくりへの提案発表協議会
- エ. 友達や社会との関わりを大切にする
 - ・租税教室からの導入
 - ・中学生（自分自身）にできること～行動化、社会との関わり

なお、上記の諸点が相互に関連し合って、有効に作用することは言うまでもないことである。

3. 単元「高齢化社会と社会保障」の構想

社会との関わりを持ちながら、高齢化社会の中に自分の問題を見つけていくために、租税教室を単元の導入として取り上げることにした。そして、我が国（特に鳥根県）が迎えている超高齢化社会に対して、政治的・財政的にどの様に対処していったらよいのか、我々が今後めざすのは、「大きな国家」（国が福祉の中心となる）なのか、それとも「小さな国家」（福祉は個人の責任で）なのかということ、あらゆる方向から追究することにした。

さらに、1年時には全生徒が総合学習の中で、「福祉」をテーマに老人や障害を持つ人たちとの交流やボランティア体験の何かを経験しており、この学習を進める上で、大きな力になると考えた。また、調査・発

表・討論学習の経験は、社会科だけでなく全教科、選択・総合学習の中で意識的に進めており、社会や友達など他との関わりを社会のシステムの中で深め、自己の在り方を追求する学習を好む生徒が多い。しかし、頭のなかで考えたことを実際に行動として表すことは、難しいことである。

そこで、他の市町村の取り組みを参考に町づくりへの提案発表協議会を計画しようと考えた。そして、自分たち中学生が、高齢化社会とどのように関わっていけばよいのか、「幸せな老後を築くために－日本の福祉のあり方－」ということで、この課題と関わり合う提案を行わせていこうと考えたのである。最後に、その提案を受け、今、中学生にできることということで、体験報告でこの単元を締めくくることにした。また、この単元全体を通して、生徒自身による主体的な追究をめざして、自己目標の設定と自己評価の実施を試みたのである。

(1) 単元目標

- 多様な体験や表現活動を通して、高齢者など社会的に弱い立場にある人々と共生していこうとする気持ちと高齢化社会に進んで関わっていこうとする意欲や態度を育てる。
- わが国の急速な高齢化にともなう社会保障の現状や課題、将来への展望を「社会の問題」に重点を置きながら、自分自身の問題として多角的な視点からとらえることができる。

(2) 指導計画（全8時間）

＜第1次＞財政のしくみと高齢化社会の到来の影響を知ろう …………… 2時間

- 租税教室から財政のしくみをつかむ
- 高齢化社会の到来とその影響について考える
(本時の学習 1 2/2)

＜第2次＞調査を行おう…………… 1時間＋夏休み

- 調査対象の分担と調査計画の立案
- 調査の実施と検討

＜第3次＞調査をまとめて、発表会を開こう …………… 3時間

- 相手に分かる発表の準備
- 発表者の立場に立って、話を聞く(発表会・2時間)

＜第4次＞「幸せな老後を築くためには」どうしたらよいのか、考えよう …………… 2時間＋課外

- 多様な取り組みを知る (本時の学習 2 2/2)
- 提案発表協議会を開き、話し合う
- 自分の取り組みを考える

(3) 目標分析

時数	学習問題	学習活動	観 点 別 目 標			
			関・意・態	思考・判断	技能・表現	知識・理解
2	財政のしくみと高齢化社会の到来の影響を知ろう	○租税教室から財政のしくみをつかむ ○高齢化社会の到来とその影響について考える	税や財政に興味を持ち、高齢化社会の到来の影響を考えようとする			わが国の財政や社会保障の現状を理解する
1 + 夏 休	調査を行おう	○調査対象の分担と調査計画の立案 ○調査の実施と検討	意欲的・協力的に調査活動を行おうとする	調査した相手の立場に立って、考えることができる	調査計画を立案・実施し、その見直しを行おうとする	老人福祉の現実と課題を理解する
3	調査をまとめて、発表会を開こう	○相手に分かる発表の準備 ○発表者の立場に立って話を聞く	目標を持って、発表会に臨もうとする		調べたことを相手に分かりやすく発表することができる	
2 + 課 外	「幸せな老後を築くためには」とうしたらよいのか、考えよう	○多様な取り組みを知る ○提案発表協議会を開き、話し合う ○自分の取り組みを考える	高齢化社会の到来に対して、前向きに考えようとする	自分なりの対策を持ち、わが国の進むべき道を見つけ出すことができる	自分なりの考えや取り組みを、自分の得意な方法で相手に伝えようとする	他国や他県の取り組みを知り、自分のプランづくりの参考にすることができる

(4) 本時の学習 1

① 目 標

- わが国が抱える財政上の課題や超高齢化社会の到来に興味を持ちながら、それが国民生活や財政に及ぼす影響に気づくとともに、両者を関係づけることができる。

② 本時の展開

分	学習活動と予想される生徒の反応	教師の支援と留意点
5	1. わが国が抱える財政上の課題を発表する。 ・ 国債残高の増加による財政への圧迫 ・ 高齢化や財政収入の安定のための消費税率のアップ ・ 高齢化社会の進展にともない、若者の負担が増加してくる	○どこが問題なのかを明らかにするために、国債の発行や消費税アップをしてはいけないのか尋ねてみる。
10	2. 財政収入の不足を補い、様々な事業を行うために政府がどのような方法をとっているのか説明を聞く。 ・ 財政投融资	
10	3. 歳出に占める割合を伸ばしている社会保障関係費とはどのようなものか調べる。 ・ 公的扶助 ・ 社会保険 ・ 社会福祉 ・ 公衆衛生	○4つの柱を明らかにするために、生徒たちにも関わりがあるような事例を用意する。
10	4. 超高齢化社会の到来は財政を中心として、我々の生活にどのような影響を及ぼすか、話し合う。 ・ 財政の危機を招き、税金が高くなる ・ 家庭で面倒を見られないケースが増える ・ 老人の虐待がおこる	○超高齢化社会の到来と財政との関連をつかみやすくするために、板書での構造化を図る。

10	<p>5. 「幸せな老後を築くためには…」、2つの意見（「A 大きな国家」か「B 小さな国家」か）のどちらを自分 は選ぶか、発表する。</p> <p>A～・国家の責任 ・自分たちもいずれは… ・個人では貧富の差が出る</p> <p>B～・税金のアップはダメ ・個人の責任 ・企業の競争でよいサービスを</p>	<p>○「国民一人ひとりを大切にする社会を築く」という視点を尊重する。</p>
5	<p>6. 本時の感想や今後の計画、調査対象や内容についてのワークシートを記入する。</p>	

③ 評価の観点と方法

- 超高齢化社会の到来が国民生活や財政に及ぼす影響を指摘できたか。(発言、感想)
- 「幸せな老後を築くため」の2つの意見（「大きな国家」か「小さな国家か」）に対する自分の考えを持つことができたか。(発言、ワークシート)

(5) 本時の学習 2

① 目標

- 「幸せな老後を築くために」は、社会システムや町づくりをどうしていったらよいのか、行政・住民・企業の3つの視点から考えるとともに、中学生としてできることを話し合い、自分のしてみたい活動を見つけることができる。

② 本時の展開

分	学習活動と予想される生徒の反応	教師の支援と留意点
5	<p>1. 前時までの学習を振り返り、本時の学習のねらいを明確にする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・超高齢化社会に対応するための問題点 ・「大きな国家」か「小さな国家」か ・「幸せな老後を築くために」は、どのようなプランを立てたらよいのか 	<p>○超高齢化社会の到来による問題点を思い出すために、今までの学習や調査結果を整理する。</p>
15	<p>2. 各班が立てたプランを発表し、それぞれに問題はないか話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・助け合う社会 ・みんなでがんばるボランティア ・ふれあいで築いていこう幸せな老後 ・新時代 共に生きよう・助け合おう ・心に愛の灯を ・やりたいことを老後も ・ダメ！老人の一人ぼっち ・助け合えるまちづくり ・お年寄笑顔のあふれる町づくり 	<p>○自分たちが考えたプランを分かりやすく伝えるために、画用紙に要点をまとめるとともに、そう考えた理由を述べる。</p>
15	<p>3. 各グループのプランに共通する点や他の大切だと思うことを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お互いの助け合い（行政・企業・住民） ・地域住民のボランティアネットワーク ・お年寄りの生きがいとふれ合いの場 ・施設設備の充実やヘルパーの増員 	<p>○3つの立場（行政・企業・住民）とそれらの連携の必要性を明らかにして行くように、板書を工夫する。</p>

10	4. 中学生の自分たちにもできることはどんなことか話し合う。 ・ボランティアに進んで参加する ・近所のお年寄りに声をかける ・老人ホームや公民館のミニサロンに出かける（話し相手や特技の披露） etc.	○具体的活動をイメージするために、資料を提示したり、周りの生徒と相談したりする。
5	5. 自分のやってみたい活動を考える。	○活動への意欲づけのために、身近なことから取り組むように伝えたり、具体的な相談先を知らせたりする。

③ 評価の観点と方法

- 「幸せな老後を築くため」のプランのポイントが把握できたか。(発言、ワークシート)
- 中学生の自分にもできることが、見つけられたか。(発言、ワークシート)

4. 実践と考察

前項の構想にしたがって授業実践を行ったわけであるが、2-(2)で述べた5つの視点に基づいて構想した、2-(3)の方法面からのアプローチの4点について具体的に実践を紹介し、考察を加えてみたいと思う。

(1) 主体的な追究を大切にする

生徒たちが、この高齢化社会の問題を身近に感じ、自分の問題として追究していくために、超高齢化を迎えようとする今、財政危機を抱える日本にとって「幸せな老後を築くためには…」めざす方向はどちらなのかとして次の2つを提示した。

- A～たとえ税金を上げてでも、国が責任をもって幸せな老後を保障すべきである。(「大きな国家」)
 B～これ以上の増税は許せない。個人の責任で自分の老後を考えればよい。(「小さな国家」)

授業の話し合いの中では、Bの「小さな国家」を選ぶものは1割程度しかいなかったものの、授業最後のプリント記述によれば、「大きな国家」が約7で「小さな国家」が約3割というところであった。それぞれの代表的意見は、次の通りである。

A「大きな国家」

- ・いずれは自分も高齢者となる。
- ・一人で背負い込むより、みんなで協力した方がよい。
- ・障害を持つ祖父やその家族を見ていると、世話や経済的な面がたいへんなので、国がもう少しお世話をしてくれたらと思う。
- ・個人の負担にも限度がある。
- ・今まで頑張って国や私達を支えて下さったのだから、今度は自分たちが支える番だ。

- ・国の存在意義とは、こうした時に発揮されるのである。
- ・家族など身寄りのない人は、だれが支えればよいのか。国に頼るしかない。
- ・憲法に保障されている権利である。
- ・貧富の差で老後が決まることはいけないと思う。
- ・ヨーロッパの国々だって、やっていっているのだから、日本だって大丈夫。

B「小さな国家」

- ・国の現在の財政状況では、これ以上の高齢者福祉に対する保障は無理である。
- ・国としてのこれ以上の支出は、将来的にまた新しい問題をつくる可能性がある。
- ・自分の人生、余生を自分で考えることが大切である。
- ・国に頼ってばかりいて、何もしない人が現れると頑張った人との間に不公平が生じる。
- ・Aの「大きな国家」だと若者の負担が大きくなりすぎて、不満がつのる。
- ・現在の国の状況では、頼ることができないのではないか。

このそれぞれの考えを裏づけるための調査に出かけるのである。そして、調査やそれぞれの発表を通して、自分の考えが揺らいだようである。ある女子生徒（H女）は、調査後（老人ホーム）には、

老人ホームに入所するには、すごく順番を待たなければいけなかったりして、大変なことなのが分かった。また、入所したくてもできない人たちがたくさんおられるということも分かりました。さらに、費用が1ヵ月30万円も必要だと聞きました。

これが、個人で負担することになれば大変なことになると思うので、大きな国家の方がいいと思います。

と述べていたものの、発表会後の感想では、

お年寄りの方みんながみんな、大きな国家を望んでいるわけではないことを知った。シルバー人材センターやボランティアセンター、公民館など自分で働いたり、趣味を見つけて活動したりとか、自分で活動できる人たちにとっては、国からの年金で満足するよりも自分達の生活を築いていった方がいいのかもしれないと思った。

といろいろな方向を考え始めていた。また、T女は調査終了後にこんな感想を述べている。

私は、この調査をするまでは「絶対に大きな国家がいい。国に面倒を見てもらおう。」とっていました。しかし、調査でゴールドプランの現状などを知り、少し不安になりました。もしかしたら、国の対策が追いつかないということが起こりそうな気がしたからです。

中には、この「大きな国家」か「小さな国家」かという問題について、次のように考える生徒が数多く見られるようになってきた。

○僕たちが大人になるころには、確実に超高齢化社会がくることは避けられない。もっとみんなが、そのことを把握する必要があると感じた。「大きな国家」か「小さな国家」かではなく、誰もが国から福祉を受けられる、それが大事だと思う。そのためには、「大きな国家」と「小さな国家」の考え方のバランスをとることが必要だと思う。(O男)

○私は、「大きな国家」と「小さな国家」の両方が必要だと思う。自己負担といっても本当に負担になるような負担はダメだと思うし、将来、国の財政が破綻しても困る。それに、それぞれのいいところがあるので、バランスよく2つをミックスすることが、大事だと思う。そして、高齢者の多様なニーズに答え、高齢者が生き生きと過ごせる環境を整えていくことが何より大切だと思う。(K女)

結局のところ、超高齢化社会の到来を考える中で、「大きな国家」がよいのか「小さな国家」がよいのかではなく、それぞれがバランスを持って充実し、高齢者

にとっても、それを支える若者にとっても夢と生きがい、そして、安心が持てる社会を築いていくことが大切だということに生徒たちは、気づいてきたようである。この、「大きな国家」か「小さな国家」かという課題は、生徒たちに高齢化社会を家族を中心にした感情的な老後のあり方ではなく、社会のシステムとしてのあり方を追究させることにたいへん役立ったと感じている。また、調査を行う中で、自分たちの役割やできることをみつけようとする生徒や自分の家族のことを今一度振り返ろうとする生徒が多数見られるようになってきたのである。そして、「幸せな老後を築くためには」という次なる課題を設定することができたのである。

さらに今回、生徒たちが自分自身の問題を見つけ主体的な追究を促すために、自分自身の学習計画を立て、自己目標を掲げることを試みてみた。その有効性や成果について、検証することができないものの、これからは、こうした取り組みが大切になってくるように感じている。またそれは、自己目標の設定と同時に、自己評価（自己への振り返り）が大切になってくるのである。さらには、相互評価を取り入れて、自分自身のよさや現状というものをしっかり把握していくことが大切だと考える。こうした自己目標の設定や自己評価などを通した学習計画の立案ということは、一朝一夕にできるようになるものでもなく、3年間を通しての地道な積み重ねが大切になってくることは、言うまでもないことである。それでは、今回使用した学習計画表を載せておくことにする。

資料1 「高齢化社会と社会保障」学習計画表

「高齢化社会と社会保障」学習計画表
(2)組(30)番 氏名(繁) Y. K.
※ 学習への取り組みや友だち・社会との関わりについて、自分なりのめあてを具体的に書きましょう!

時	学習内容	めあて	反省・感想
2 6 25	租税教室を 通して、財 政のしくみ と高齢化社 会の到来の 影響を知る	租税教室で、一 生懸命に話を聞 こうとする	・私語をせず、きちんとしに態度で話を聞 けたいと思う。それに、終わった後疑問 問は思、そのことが質問で解決して、有意 義な時間だったと思う。 ・租税を学ぶにあたって、どうかが 知りたいのか、又何故という問題を 知るのには、学びたいという意欲を 持つことができた。
1 7	調査の実施 対象	計画 秘密に計 画をして、後で 困らぬように ポイント	・計画は細かく、内容から、誰かへ ふたへ、話を訪ねるかまで考えること かどう、資料、ニュースに行きかたに ・礼儀正しく、調査を行うことができた。 ・アンケートをとって、何人もの方に話を を分かつことにより、いろいろな意見を て結論を出したことにできた。
2 9 9	発表会 <工夫> <分担>	まとめ わりやすく 簡潔にまとめる 発表 要約資料 きちんと分けて 各自が責任を持つ	・限られた範囲の中に、内容を端的に 分かりやすく書くことができた。質問は 先立って準備して上から聞いていたと思 う。資料は、事前に準備した。自分 ・みんなの都合を考慮して、みんなの みんなと説明したいという思いも あって思った。みんなの意見を みんなと分けて責任を持つことには よかった。
3 9 9	「幸せな老 後を築くた めにはどう したらよい のか」考え よう	プランづくり 自分の意見を しかり出す 提案発表論議会 他の班の意見と 比べ、検討	自分の意見や友人の意見のふりか とるを、合わせてわりと実行できた 案をまとめた。 他の班の意見を聞くことにより、自分 の案のよい所や悪い所を再発見する ことができた。
9	自分の取り 組み	自分の取り組み 自分なりに、続け ていけることを	身近なことからはじめ、続けていける 気がする。探求をするというの、 高齢化にはかわらなく、いいことなの を繰り返したい。

(2) 多方面からの情報収集とメカニズムの解明

超高齢化社会の到来に対する福祉の現状や人々の意識を探り、そこから、わが国のめざすべき方向は、「大きな国家」なのか「小さな国家」なのかを考えるために、次のようなところへグループになって調査に出かけた。調査の実施は夏休み中とし、グループ編成については、自分が行ってみたいところで編成した。

<調査場所>

- ①県庁・市役所
- ②社会福祉協議会+デイサービスセンター
- ③老人ホーム
- ④公民館+老人会
- ⑤シルバー人材センター
- ⑥ボランティアセンター
- ⑦いきいきプラザ+介護器具メーカー
- ⑧消費者センター
- ⑨保険会社

※共通調査として、一般家庭・市民への調査を実施した。

<調査内容>

- 高齢者福祉の現状と問題点
- それぞれの努力点と今後の方向
- 社会保障・高齢者福祉に対する意識
- 「大きな国家」か「小さな国家」か

資料2 「幸せな老後を築くために」調査計画

「幸せな老後を築くために」調査計画

<メンバー> (2)組
 ・班長 (藤 彩)
 ・班員 (栗 菜 郁)、(西 倫)、(若 郁)

<調査対象> 第一生命 生命保険会社、住友生命、明治生命、日本生命

<調査時期> 7月中旬に調査

<質問事項>

企業に聞く事	個人で調査する事
・老後保険にはどのようなものがあるのか(種類)	20~30代 (4)
・老人の方はどう思っておられるか? 保険について	30~40代 (4)
・それをどのように対処(対策)をしておられるか?	40~50代 (4)
・これからの社会保障はどのように変化すると考えているか?	50~60代 (4)
・その変化への対応は?	60~代 (4)

①20~40代 自分達の今後の事を考えて、老後を政府が保証してくれるほうがいいか自分で責任を持つておくほうがいいか。また、そのことによる税金が払える事をどう思うか?

②60~それ以降 今の老後保障(年金)などの準備をどう思うか? 不安なことはないか?

この調査を終えた生徒たちは、次のような感想を述べている。

- うぐいす苑を訪ねたり、老人福祉や老人介護についての書物を読んでも、こんなに?!と思うほど、その現状がひどいものであることを知らされました。それらの問題への国の対応、個人の対応はどうあるべきなんだろう……と深く考え込んでしまいます。(I女・老人ホーム)
- 僕は、福祉のもう1つ別な面を発見したような気がした。老人の福祉というと介護に関する問題だけのように思っていたが、そうではなく、元気で健康な老人の存在も大きいことに気付いた。そういう老人もたくさんいるので、対策を忘れてはならないと思った。健康なお年寄りたちは、まだ社会で活躍したい、積極的に生きたいと願っておられる。この社会で、お年寄りたちが十分に活躍できる場はあるのだろうか、とふと疑問に感じた。(F男・シルバー人材センター)
- 私が思っていたことより、たくさんの方が行われていました。例えば、ホームヘルプでも、長期のものから短期のショートステイと呼ばれるものまで、相手を考えて対策が立ててありました。でも、いろいろな対策や考えを持っていても、それを実行できるだけのボランティアをしてもらえる人には、限度があることも知りました。(F女・社会福祉協議会)
- 高齢者の方だけでなく、若い世代にも様々な問題があると分かった。センターを頼らず、私達自身、よりよい消費者をめざすことが、必要とされている。高齢者に優しい社会を築くことが必要だと思った(企業側も考える)。(T女・消費者センター)
- 僕は、あまりボランティアに関心とかもなかったし、たいして知らなかった。でも、今回の調査で、詳しくボランティアについて知ることができた。1番心に残ったのは、ボランティアの人数が足りないということだった。また、困った人がいて、ボランティアを頼みたくても、センターの存在を知らないため、そのままになってしまうこともあるそうだ。もっと、ボランティアセンターの存在をアピールしていくべきだと思う。そして、僕たちがもっと関心を持ち、ボランティアの意識を高めていくことが大切だと思う。(K男・ボランティアセンター)
- 高齢化・高齢化と騒いでいるわりには、国民

一人ひとりがやっている協力や対策っていうのが、本当に少ないと感じた。「大きな国家」「小さな国家」など考える前に、本当に自分できることをやっていった方がいいと思う。

(T男・いきいきプラザ)

○社会保障(老人福祉)について、全くといっていいほど知らなかったのが、高齢化のピークに向かっている今、いろいろな対策がとられている事も知りませんでした。これからのためにたくさんの案を出してサービスや施設を増やしたりするのは良いことだと思いますが、調査で分かった都市部と山間部との格差については、見直さなければいけないと感じました。また、中学生にできることについて、はじめから“何もできない”と思っていましたが、身近にもできることがたくさんあったので、手紙などを出してもいいなと思いました。

(S女・県庁、市役所)

○高齢者の方は、「大きな国家」で支えて欲しいと思う反面、若者に負担をかけたくないと思っておられることが分かりました。また、「小さな国家」を支持している人たちは、国に任せると一人ひとりの自由がきかなかったりすると考えておられました。でも、高齢者の方々には、意外と楽しみにしていることが多く、孫や子ども

との関わりといった心のふれあい・家族との生活を望んでおられる方が多かったです。そう考えると、「小さな国家」の方が良いのかもしれないと思いました。(T女・公民館、老人会)

このように、調査の場所によって様々な気付きを生徒たちは持ったようである。そして、いずれの場所においても、高齢化社会の到来とその対策や課題を自分自身にとって、切実なものとして受け止めるようになっている。また、調査を実施するにあたって、「大きな国家」か「小さな国家」かという課題は、調査の方向を生徒たちに明確に与え、焦点を持った調査を可能にしたといえるのではなからうか。

この調査を通して、多くの生徒たちは、次のような感想を持つようになったのである。

1番思ったのは私たち中学生は何ができるのか……ということでした。JRCに入ってボランティア活動に参加することなど考えましたが、最後にはやっぱりお年寄りの心の支え・話し相手になることだと思いました。口で言うのは簡単ですが、行動に移すのは難しいことです。それをするのが私たちの役目なのではないでしょうか。(S女)

それは、高齢化に対して「何が、自分たちにできるのか」という意識・自覚の芽生えと見ることができのではなからうか。

資料3 発表会資料プリント

ボランティアセンターへ行こう?

① ボランティアセンターの役割

② ボランティアセンターの現状

③ ボランティアセンターのサービス

④ 高齢化社会の現状

⑤ 今後の展望

⑥ 結論・感想

⑦ 介護保険

⑧ 前段の入りについて

⑨ ボランティアの精神

⑩ ボランティアの役割

⑪ ボランティアの活動

⑫ ボランティアの意義

⑬ ボランティアの未来

⑭ ボランティアの大切さ

⑮ ボランティアの楽しさ

⑯ ボランティアの大切さ

⑰ ボランティアの楽しさ

⑱ ボランティアの大切さ

⑲ ボランティアの楽しさ

⑳ ボランティアの大切さ

㉑ ボランティアの楽しさ

㉒ ボランティアの大切さ

㉓ ボランティアの楽しさ

㉔ ボランティアの大切さ

㉕ ボランティアの楽しさ

㉖ ボランティアの大切さ

㉗ ボランティアの楽しさ

㉘ ボランティアの大切さ

㉙ ボランティアの楽しさ

㉚ ボランティアの大切さ

㉛ ボランティアの楽しさ

㉜ ボランティアの大切さ

㉝ ボランティアの楽しさ

㉞ ボランティアの大切さ

㉟ ボランティアの楽しさ

㊱ ボランティアの大切さ

㊲ ボランティアの楽しさ

㊳ ボランティアの大切さ

㊴ ボランティアの楽しさ

㊵ ボランティアの大切さ

㊶ ボランティアの楽しさ

㊷ ボランティアの大切さ

㊸ ボランティアの楽しさ

㊹ ボランティアの大切さ

㊺ ボランティアの楽しさ

㊻ ボランティアの大切さ

㊼ ボランティアの楽しさ

㊽ ボランティアの大切さ

㊾ ボランティアの楽しさ

㊿ ボランティアの大切さ

さて、調査によって様々な意識を持った生徒たちに、共通の知識や情報・願いを持たせていくために、発表会を実施したのである。資料3のような、資料プリントをもとに、各班が発表したのである。その発表を聞いて、生徒たちは次のような感想を持ったのである。

○調べた場所によって、考えが違っていった。「大きな国家」「小さな国家」それぞれにメリット・デメリットがあるからだと思う。そして、調査した場所によって、その一方が強調されるからこういう結果になったと思う。だから、それぞれの考えを聞くことが、画一的な考えにならないでいいと思った。(T男)

○私たちが調べきれなかった分まで知ることができた。特に驚いたのは、高齢者の方が、私が思っていた以上に多くの問題を抱えていることでした。これから、高齢者の抱える問題を真剣に考えていくべきだと思いました。(F女)

○似たような課題で調査したのだから、きっとどこも同じ様な結果になるだろうと思っていたが、その考えは大きくはずれた。みんないろいろな視点から見ている、「こんな事も起こっていたのか。」「こんな考え方もあるのか。」と関心させられっぱなしだった。(N男)

○みんなの意見を聞いていくうちに自分で考えていたことがよく分からなくなった。「大きな国家」派のいうことも分かるが、「小さな国家」派のいうことも分かる。でも、どちらにも欠点がある。「大きな国家」の場合、税金を払えない人もいるわけだし、「小さな国家」といっても、個人の責任で老後を築いていくのも限度があると思うし……。だから今は、いまのままでやっていると、なりたっていないと思う。(T男)

○けっこう他の人の感想を聞いたりすると「小さな国家」から「大きな国家」に変わったという人が多かったですが、私は逆です。これからだんだんと年金なども減ってくるかもしれないので、ある程度は自分で持っておいた方が良くと思いました。また、「世話をかけたくない」というお年寄りの方々の願いでもあるからです。

(S女)

○最後の一人ひとりのコメントを聞いて、人によって考え方がそれぞれ違うなと驚いてしまった。僕は、「大きな国家」で幸せに過ごしたいと思っていたけど、みんなの意見がしっかりしていたので考えが揺れに揺れてしまった。僕たちが調

べ足りなかった大切な点とかが調査されていて、考えが揺れながらも深まっていった。(I男)

○たくさんの意見を聞いて、「大きな国家」ではメリットとしてお金の負担を人々にかけすぎないということ、反対にデメリットとして、高齢者の一人ひとりにうまく介護が行き渡るのか不安があった。一方、「小さな国家」では、細かな世話は行き届くであろうが、それが全ての人には行き渡らないかもしれないということがあげられます。これからは、この2つの関わり方が大切になってくると思います。松江の福祉についても、進んでいたとはいえ、とても行き届いているとはいえないことが分かりました。サービスとか、もっといろいろな施設やサービスが大切だと感じました。(T女)

このように、他の班の発表を聞いて自分が調べたこととは異なった事実や気付かなかった視点を得ることができたのである。そして、今までの自分の考えを見直していかざるを得なくなったのである。そのために、「大きな国家」と「小さな国家」のメリットとデメリットとをお互いに検討するとともに、現在のわが国の現状とこれからの未来予測とをしっかりと働かせていったのである。こうして、はじめは単なる願いや理想からの意見だったのが、しっかりとした数値や納得させる理由からの主張へと生徒たちの意見が深まっていったのである。

そして、「大きな国家」なのか「小さな国家」なのかではなく、この両者を有効に働かせていくためには、どのような社会のシステムを築いていくことが必要なのか、という問題意識へとステップアップするのである。まさに、社会のメカニズムの追究を起点にし、自分の願いを基にした問題解決への提言へと進むのである。

(3) 意志決定の場の設定

調査・発表会を終えて、いよいよ「幸せな老後を築くためには」という課題のもと、お年寄りが幸せに暮らせる社会の実現のためには、どんなことが必要なのかを提言することになったのである。しかし、現段階の生徒たちにはまだ、イメージらしきものはあるものの、こうした提案を行うためには、それを具体化したりトータルで考えていくモデルや情報が不足しているのである。そこで、福祉の充実している北欧の国々の様子やわが国や島根県の市長村の中から具体的な取り組みの様子をVTRやTP、プリントで紹介することにした。そして、各自の意見をもとに、調査班の提案を行ったのである。

以上のように、公民館等を中心にしたボランティアや交流・助け合い社会（町づくりのシステム化）を提案する班がほとんどであった。そして、高齢者の生きがいを大切に考えようとしているのである。また、最後には自分たち中学生にもできることを考え、いろいろな提案を行っていた。

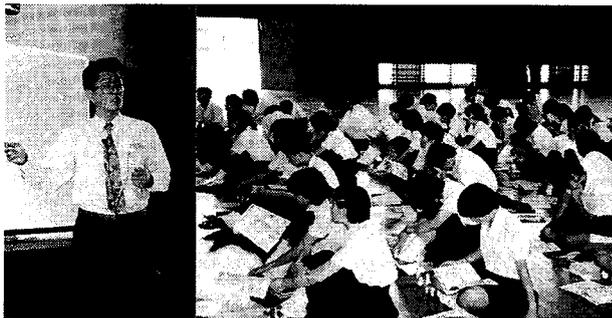
(4) 友達や社会との関わりを大切にする

今回の学習の大きなねらいは、自分が社会の一員であることを自覚し、家庭・地域・国家・国際社会といった自分を取り巻く社会にどのように関わっていくか、社会の中で自己がどうあるべきかを追究していく学習を進めていくことである。そのために、今まで述べてきたような班での調査・発表会を実施したり、「提案発表協議会」を開催したりもしたのである。さらには、自己目標や自己評価（自分への振り返り）を取り入れたのである。また、この単元の導入と終末に次のようなことを考えてみた。それは、「租税教室」からの導入と行動化・実践化をめざして、「中学生（自分自身）にできること」と称しての体験報告である。

① 「租税教室」からの導入

6月25日の5校時（1・2組）、6校時（3・4組）と2クラス合同で1時間ずつ松江税務署の下野税務広報官から話を伺ったのである。

写真「租税教室」



税の学習をはじめた生徒たちの感想は、次の通りであった。

○税を身近に感じられるようになった気がしました。「税」というと難しく、嫌いというようなマイナスイメージを持っていました。また、消費税が引き上げになったことに対しても怒りを覚えていました。しかし、今日のお話で、税は大切なんだと感じました。75兆というような莫大な資金を集めるためには、酒・たばこなど身近なものからも税をもらわないといけないという必要性を感じさせられました。税というのは、私たちの将来、今の生活のためになくはならないものなんだと感じました。（K女）

○高齢化までが増税に関係しているのには驚きました。鳥根県は、ものすごい高齢化だから、この先どうなるのか不安になってしまいました。それに、国も莫大な借金をしていることにびっくりしました。借金は早く返さないといけないし、増税されるのはいやだし、なんとなく複雑な気持ちになってしまいました。（S男）

○国は、すごくたくさんの借金を持っていてたいへんだなど分かって、消費税が高くなってもしかたないかもしれないと思いました。また、高齢化社会の深刻さを改めて感じました。国も、私たち国民のためにお金を使っているのだから、税金をいやがってはいけないと思いました。

（H女）

○税というのは大人たちの問題だと思っていたけど、消費税を払ったり、学校生活でもこの税が使われていることや将来のことを考えると学んでよかったと思う。もう少し、自分に関わっているという意味で関心を持っていきたい。（M男）

このように、普段はなかなか興味を持ってない税の問題を外部の専門家を招くことで、意欲的な学習へと変えていくことができたのではなかろうか。この学習で得た情報・知識をもとに本単元が、展開されていくのである。

② 体験報告「中学生（自分自身）にできること」

「高齢化社会と社会保障」の学習の締めくくりとして、中学生である自分たちに何ができるのか、何をしようとするのか、そして、何をしたかを見てみたいと思う。「提案発表協議会」が終わり、最後に自分たち（自分自身）にできることとして、一人ひとりが提案した活動は次のようなことであった。

- ・公民館などでの交流会に参加する。
- ・老人ホームへの訪問を行う。
- ・お年寄りの方を講師として招く。
- ・学校でのボランティア活動に参加する。
- ・近所のお年寄りを訪ねたり、挨拶を交わす。
- ・自分の祖父母を大切にす。電話をかける。
- ・独居老人宅を訪問したり、手紙を送る。
- ・ロータスクーポンなどを集めて役立ててもらおう。
- ・学校行事にお年寄りを招待する。
- ・総合学習での福祉体験など学習の場を生かしたり、自分の考えを持つように学んでいく。
- ・夏休みや土曜休業日などを利用して、話し相手になるなど活動する。
- ・ボランティアセンターなどを活用する。

いくのかということである。そのために、調査や発表など体験の場を組み込んでいるわけであるが、その方途をさぐるためにも、今後、実践の積み重ねが必要であろう。さらに、自己評価だけでなく、相互評価や教師の評価をどのように結び付けていくかが大きな課題と言えよう。

第3は、こうした実践をしながらも、最後の行動化・実践化について、「老人ホームの訪問などは、中学生にもできるけど、学校単位でやらないと難しいので学校からしたらいい。」(N女)というようになかなか社会の中に飛び込めない部分があるというのである。この壁をどのように乗り越えさせていくのか、また、社会科に留まらず、特別活動や総合的学習との連携をどう図っていくのかがこれからの課題として残った。

そして最後は、問題解決的な学習をいかに構想していくのかということである。また、「真の問題」づくりをどのように行っていったらよいのかということが重要な課題なのである。自分自身の問題をどうやったら見つけさせることができるのか。今回は、「租税教室」を導入として、財政の課題から高齢化の問題へと追っていったわけである。そして、わが国のめざすべきは、「大きな国家」なのか「小さな国家」なのかを仮の問題として調査・追究をはじめたのである。それが、調査が終わり、他のグループの発表を聞き終わるころには、問題は「幸せな老後を築くためには」どうしていくことが必要なのか、自分たち中学生にできることは何なのか、という真の自分自身の問題へと高まっていくわけである。こうした、2段構えの追究課題(問題)がこれからは大切になっていくように考える。

今のところ、そのための教材の条件として次の3点を考えている。

- ① 社会や時代・地域のしくみや動きをとらえることができ、それに関わる人間の多様な見方や願い、生きざまが見えてくる教材
- ② 生徒一人一人の関心や視点に応じて、多角的な追究や多様な表現が可能で、友達や社会との関わりを持つことが可能な教材
- ③ 自分の生活についての見方・構え方について、考える契機を与えることが可能な教材

社会に「生きる人間の姿」は、我々と社会との関わりを具体的に示し、自己の生き方に大きな影響を与えてくれる。また、それを教材として追究することは、生徒が疑問を持ったり、共感したりしやすくなり、社会や友達との関わりをもちながら、主体的な追究とともに自分自身への振り返りが可能となると考えている。

本稿を終えるにあたって、この学習を終えた生徒の

感想を載せておくことにする。

「高齢化社会」と言われても、今まではあまりピンとこなかったけれど、学習していくうちに、とても重要な問題だということに気が付いた。また、そこからたくさんの問題が生まれており、とても考えさせられた学習だった。

はじめは、「大きな国家」がいいとか「小さな国家」がいいとか考えていたけれど、大切なのは、個人が考えなければいけないことと、国がしなければいけないことをあきらかにしながら、両方がバランスよく幸せな老後を築くために活動していかなければいけないということだと思ふ。

そして、今の日本では、ボランティアをはじめとする、支え合うシステムづくりが立ち遅れているように感じた。誰かがやるだろうというのではなく、まず、中学生にもなる私たちから行動していくことが何より大切なことではなからうか。

こうした学習が、これからも続けられ、一人でも多くの中学生がこうした問題を知り、自ら調べ、行動しようとすることを願っている。まずは、自分ができることから始めたいと思う。(K・男)

参 考 文 献

- ・第15期中央教育審議会(1996)、「第1次答申」
- ・教育課程審議会(1997)、「中間まとめ」
- ・藤井千春(1997)、『問題解決学習で「生きる力」を育てる』東京、明治図書
- ・藤井千春(1996)、『問題解決学習のストラテジー』東京、明治図書
- ・北 俊夫(1997)、『「社会科の授業」はどう変わらなければならないか』東京、明治図書
- ・片上宗二(1995)、『オープンエンド化による社会科授業の創造』東京、明治図書
- ・片上宗二(1985)、『社会科授業の改革と展望』東京、明治図書
- ・今谷順重編(1996)、『新しい問題解決学習と社会科の授業設計』東京、明治図書

(いわた やすし・社会科)

e-mail アドレス

iwataya@edu.shimane-u.ac.jp